進路ニュース

第３号　　２０２３年６月１日発行

～見なれたものをはじめて見るかのように、
初めてのものを昔から知っているかのように～

○進路ニュース今回号の**題の言葉**は、蛍雪時代６月号のインタビューで、哲学者　鷲田清一　氏が、「学びの面白さ、辛さ」について聞かれた時の言葉です。「**普段見ているものが違うように見えるようになる**」のが学ぶことで、そのためには、「**見なれたものをはじめて見るかのように、初めてのものを昔から知っているかのように**」見る練習をしなければならないと答えました。常識をとらえ直したり、逆に、共通点を探す経験をたくさん積んで、高校での学びの面白さを体得しよう。

○**志願倍率・実質倍率**について

「志願倍率」に惑わされず「実質倍率」に注目しよう

次に、私立大一般選抜の合格状況を見よう。中でも倍率の変化は、「難化・易化」を計る物差しとなる重要データだが、一般的に使われる「倍率」には次の２通りあることに注意したい。

＊志願倍率＝志願者数÷募集人員＝見かけの倍率
＊実質倍率＝受験者数÷合格者数＝実際の倍率

私立大では合格者の入学手続率を考え、独自入試で募集人員の５倍程度、共テ利用方式では10倍程度の合格者を出すのが普通だ。

関西学院大－工の例を見てみよう。一般入試（全学部日程）の志願倍率は18.4倍だが、合格者（補欠合格を含む）を募集人員の7.7倍出しているので、実質倍率は2.3倍となる。また、共テ利用入試（1月出願）の志願倍率は53.6倍もの超高倍率だが、合格者を募集人員の23.6倍も出しているので、実質倍率は2.3倍におさまった。これなら「とても手が出ない」という倍率ではないだろう。

見かけの倍率に惑わされることなく、実際の倍率を志望校選びのデータとして活用しよう。

（「蛍雪時代」６月号）

県内国公立大の志願倍率・実質倍率（2023年度入試）

左から募集人員→志願者数→志願倍率→受験者数→実質倍率→合格者数

●福井大／後期

○教育学部	13	104	8.0	32	2.5	13
○医学部看護学科	5	39	7.8	9	1.8	5
○工学部／機械・システム工	5	182	2.8	61	0.9	60
／電気電子	42	161	3.8	49	1.2	43
／建築・都市環境工	17	89	5.2	30	1.8	24
／物質・生命化学	40	136	3.4	30	0.8	30
／応用物理	27	109	4.0	35	1.3	26
○国際地域	2	96	8.0	18	1.5	15

●福井県立大／後期

○経済学部／経済	35	517	14.7	17	2.1	80
／経営	35	326	9.3	120	1.8	65
○生物資源学部／生物資源	17	187	11.0	75	3.3	23
○海洋生物資源学部・海洋生物資源	10	122	12.2	58	5.8	10
／先端増養殖	6	45	7.5	18	2.0	9
○看護福祉学部／看護福祉	10	120	12.0	45	3.5	13
／社会福祉	7	62	8.8	26	2.4	11

●敦賀市立看護大／後期

※現時点未公開のため、志願倍率の推移を掲載（2019→20→21→22→23の順）
13.1→10.7→20.6→19.0→9.9　数年続いた上昇傾向に歯止めか

（ベネッセ資料）

国公立大学の後期日程は高倍率の学科等はあるものの、**欠席率の上昇**が続いている。（欠席率 2006年度 50%→ 2023年度 63.2%）。全体的には競争率が緩和し、諦めずに「**受験を続ける**」受験生が報われやすい環境が続いている。（東進保護者進路講演会資料）

○**「学習室利用状況」**について

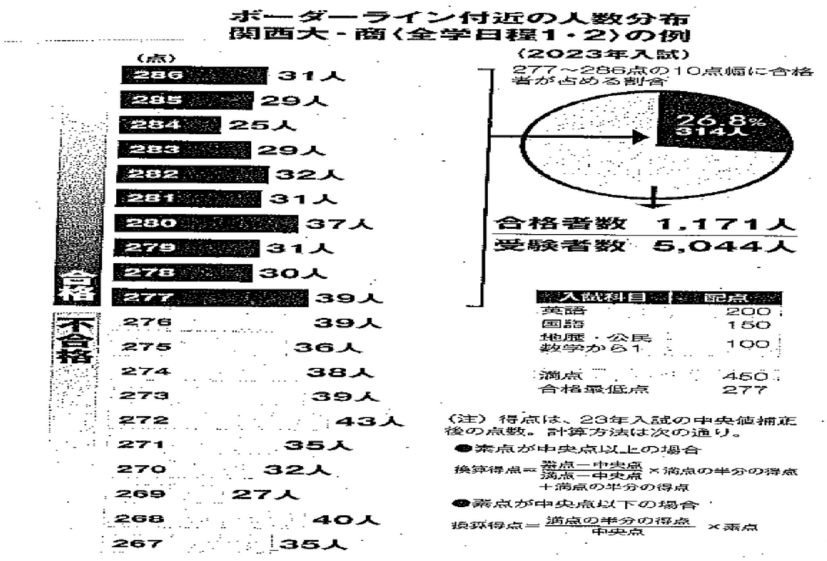
☆月間利用者数（5/30現在）

学年	1年	2年	3年	合計
4月	11	26	35	72
5月	31	70	72	**173**

利用者数が月間比で**2.4倍**となりました。学習室の存在が全学年に認知されたようです。休日にうまく利用している人もいます。

利用の際には、退校時間をしっかり守ってください。また、利用者名簿に名前等の必要事項を必ず記入してください。

○「1点の重み」について



←関西大商学部2月一般入試。合格最低点は満点450点中277点。最低点含む上10点幅に**合格者の27%**が集中。また、わずか**1点差で教室1つ分の数が不合格**となる。10点差内の不合格者は364人。

たった1つのｹｱﾚｽﾐｽが命取りになり合否が入れ替わる。

定期考査や模試の**見直しに時間をかけ**、基礎を固め、答案をﾌﾞﾗｯｼｭｱｯﾌﾟしよう。採点者は行間まで読んでくれない。答案がすべて。←（「蛍雪時代6月号」）

○「総合型選抜・学校推薦型選抜」について（医療・福祉系資格試験結果高校生向け速報号）

年々比重が高まる年内入試！

2021年度入試からは、センター試験に代わって大学入学共通テストが導入されるなど、新しい入試制度が始まりました。直前になって慌てないためにも、気になる大学の入試情報は早めに確認しましょう。

いずれも学力評価が適用されます

大学の入試には、大きく分けて、AO(アドミッション・オフィス)入試、推薦入試、一般入試の3つがありましたが、2021年度入試からは、大学入試のルールブックである「大学入学者選抜実施要項」が見直され、AO入試は「総合型選抜」に、推薦入試は「学校推薦型選抜」に、一般入試は「一般選抜」へとそれぞれ呼称が変更されました。それだけではありません。これまで学力不問の場合があったAO入試、推薦入試に、何らかの学力評価が適用されることになりました。これまでのように部活動や委員会活動、ボランティア活動や資格取得だけを頑張っていればいいというわけにはいかなくなったのです。

総合型選抜（AO入試）

基本的に誰でも自由に出願できます。各大学が求める学生像（アドミッション・ポリシー）に照らし合わせて合否判定を行います。面接や小論文、適性テストなどの総合的な評価で選抜します。近年では、これらの評価方法に加えて学力の基準を新たに設ける大学も増えていましたが、2021年度入試からは「学力」は必要条件となりました。なお多くの大学で、総合型選抜は「専願制」となっています。

入試シーズンと言えば冬のイメージが強いですが、国公立大学も含めて年内入試は年々比重が高まっています。

学校推薦型選抜（推薦入試）

大きく分けて「公募制」と「指定校制」があり、いずれも学校長の推薦が必要です。公募制の場合、大学が定めた出願条件を満たし、高校での推薦を得ることができれば、どの高校からでも出願可能です。指定校制は、大学が指定した高校の生徒のみに出願資格（評定値などの条件有）があります。

試験科目や配点だけではなく、ぜひ次の「学校推薦型選抜のチェックポイント」も参考にしてください。

2024年度
総合型選抜（AO入試）
学校推薦型選抜（推薦入試）

学校推薦型選抜のチェックポイント

●併願制か専願制か
専願の入試に合格した場合は、入学が必須になります。

●調査書がどの程度評価されるか
調査書の配点を公表していない場合は、一般選抜同様、ほとんど評価しない可能性があります。

●高校（学校長）の推薦書が必要か
必要な場合は、担任の先生を通して早めに依頼しましょう。

●既卒者でも応募できるか
一浪まで受験できる大学が多数。秋は現役生と既卒者の学力差が大きいため、既卒者割合が高い場合は、現役生がやや不利になる傾向があります。

・総合型選抜

学力＋適性・意欲・探究姿勢、実績と将来性をアピール

総合型選抜では、書類審査（調査書・志望理由書・学修計画書）・小論文・面接・口頭試問・レポート・プレゼンなどが課され、共通テストの得点が加味されることもあります。学力だけでなく、適性・意欲・探究姿勢など受験生の「人物」が評価される入試です。知識・技能、思考力・判断力・表現力、さらには主体性・協働性など、文字通り「総合」的な力が多面的に評価されます。志望理由が明確で、探究活動などで顕著な実績があり、将来性を期待させる受験生が有利です。

・学校推薦型選抜

実績と実力をアピール！社会問題にアンテナを張る

学校推薦型選抜は、調査書の「学習成績の状況」や部活動の実績など、3年間の努力の結果を目に見える形でアピールできる人に向いている入試方式です。ただし、国公立大では共通テストの得点を加味することも多いので、過去の実績だけでなく、現在の実力も兼ね備えている必要があります。小論文や面接で、教科の実力以外の力も問われます。社会問題に敏感にアンテナを張り、根拠と事例に基づいて課題に対して自分の意見を論理的に展開する力を身につけておきましょう。

↑（「蛍雪時代5月号」）